桜井谷窯跡群

—範囲確認調査—

1977．3

豊中市教育委員会

はじめに

周地のように、市域の北東部は、千里山丘陵の名で呼ばれる丘陵地帯であるが、この地は古来景勝の地として名が高く、わが市域の中では最も古くからその名を知られていた地域の一つである。すでに万葉集にその名が見出される島熊山を頂点として、なだらかな陵線が幾重にも交錯する穏やかな眺望に恵まれたこの丘陵は、かつて平安京から太宰府へ通じる要路であった西国街道に南面し、通行者の旅の疲れをしばし忘れさせたことであろう。それればかりでなく、我々にとってさらに興味深いことは、この地域が、かつて長い年月にわたって人びとを魅了して止まなかった美しい景観の下に、より古い時代の人びとの生活の様子を明瞭に物語る多くの痕跡を秘めているという事実である。

よく知られているように、我国には、5世紀になって、朝鮮半島から新しい手法による土器生産の技術が傳えられ、縄文式土器から弥生式土器、さらには土師（質土）器へと続く従来の製法に一大技術革新が加えられた。登り窯の築造とろくろの本格的使用を二大特徴とする、この新手法による土器生産は、まず、大阪府下泉北丘陵の陶邑ではじめられたが、やや遅れて、6世紀頃には、わが豊中市域の旧桜井谷地区を中心とする千里山丘陵にも傳えられた。そして、これ以後7世紀中頃まで約150年間にわたってこの地は、当時の人びとにとって欠かすことのできない生活必需品であった土器を供給するために、登り窯から立ちのぼる煙の絶える間もなく活動を続ける、いわば、最新の設備と技術を誇る一大工業団地であった。

しかしながら、特に戦後になって一挙に急速の度を加えた土地開発の影響は、次第に市域の全域に及び、とりわけ、千里ニュータウンの造成工事以後周辺地域に容赦なく押し寄せた開発ラッシュからは、かつて名勝を詠われたこの地域も免れることはできず、工業団地の遺跡地は、一転して住宅団地と化しつつある。このような現状を目のあたりにして、我々は、これら他にかけがえのない貴重な遺跡・文化財を開発の手から保護し、後世に傳えることもまた、現代に生きる者に課せられた大きな使命であることを、改めて認識しなければならないであろう。こうした意味において、今回の調査の内容が、市民の郷土の歴史や文化財に対する理解と認識に少しでも役立つことを心から期待するものである。

終りに、本調査の実施にあたり、発掘調査を快くお許しいただいた土地所有者のかたがた、ならびに適切なるご指導、ご助言をいただいた市文化財保護委員の各位に、心からなる謝意を表して刊行の言葉とする。

昭和52年3月

豊中市教育委員会

教育長　北原　富男

目　　次

Ⅰ　桜井谷窯跡群範囲確認調査……1
Ⅱ　２－23窯跡（永楽荘窯跡）……3
　　出土遺物一覧表……8
Ⅲ　２－10窯跡（新池北畔西窯跡）……12
Ⅳ　２－２窯跡（下地蔵岡窯跡）……14
　　出土遺物一覧表……19
Ⅴ　まとめ……21

挿図目次

第１図　桜井谷窯跡群分布図
第２図　登り窯模式図
第３図　２－23窯跡付近の地形
第４図　２－23窯跡トレンチ位置図
第５図　２－23窯跡トレンチ断面図(1)
第６図　２－23窯跡トレンチ断面図(2)
第７図　２－23窯跡出土遺物実測図(1)
第８図　２－23窯跡出土遺物実測図(2)
第９図　２－10窯跡付近の地形
第10図　２－10窯跡トレンチ断面図
第11図　２－10窯跡トレンチ位置図
第12図　２－10窯跡出土遺物実測図
第13図　２－２窯跡付近の地形
第14図　２－２窯跡トレンチ断面図(1)
第15図　２－２窯跡トレンチ断面図(2)
第16図　２－２窯跡地形実測図
第17図　２－２窯跡出土遺物実測図
第18図　２－23窯跡調査風景

図版目次

図版１　２－23窯跡遠景
図版２　２－23窯跡トレンチの状態
図版３　２－23窯跡第３トレンチ床面の状態
図版４　２－10窯跡遠景及びトレンチの状態
図版５　２－２窯跡の位置及びトレンチの状態
図版６　２－23窯跡第３トレンチ床面出土遺物
図版７　２－23・２－10・２－２窯跡出土遺物

例　　言

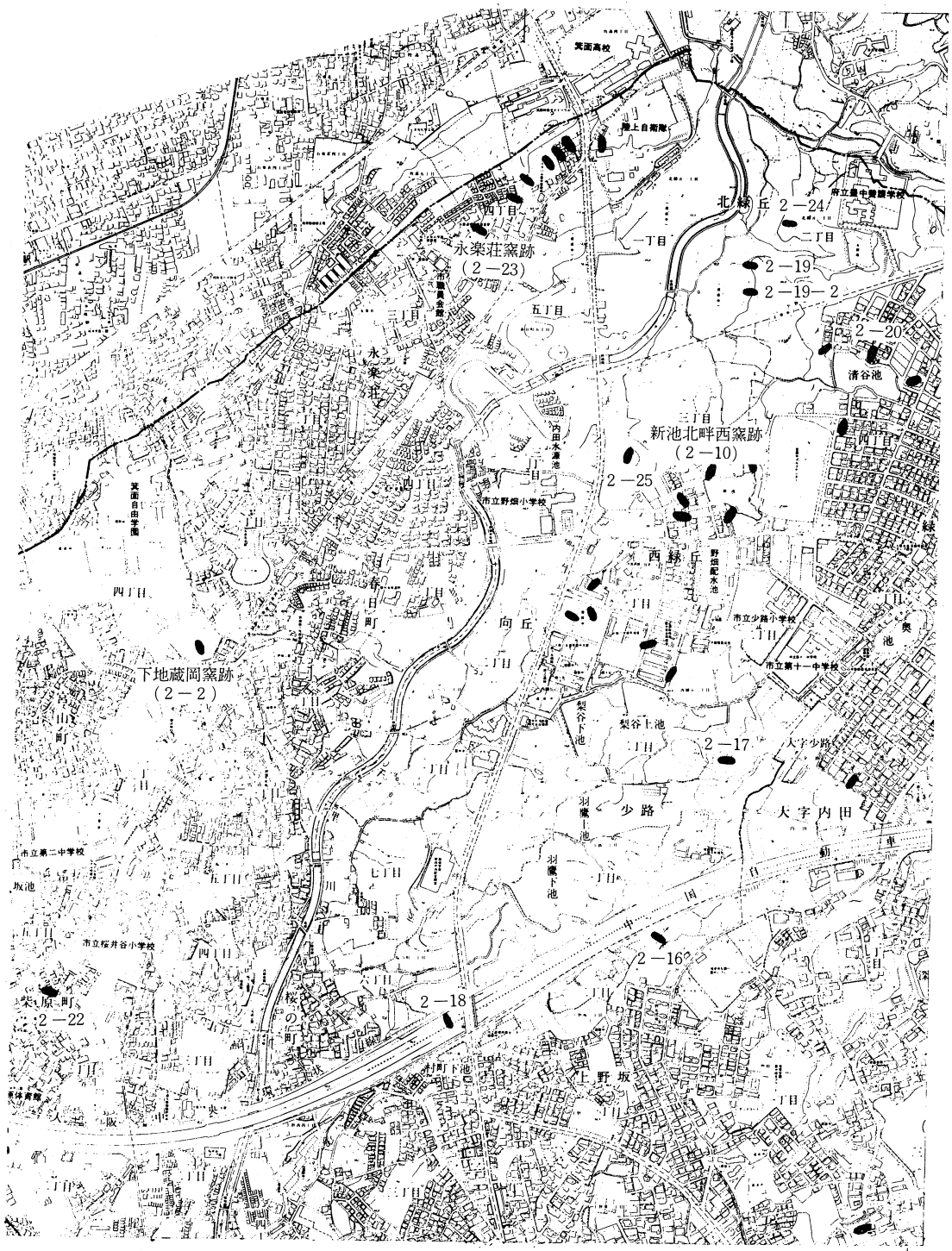
１．本冊子は、豊中市教育委員会が昭和51年度文化財保存事業として、国庫(50%)及び府費(25%)の補助を得て、総額1,000,000円で実施した桜井谷窯跡群範囲確認調査の報告である。

２．現場での調査は、島田義明（豊中市教育委員会文化財担当職員）・厚美正子があたり、橋本正幸ほかの協力を得て、昭和52年２月１日から同３月19日にかけて実施した。

３．出土遺物の整理及び報告書の作成については、島田義明・厚美正子・橋本正幸があたり、昭和52年３月20日から同31日にかけて実施した。

４．調査にあたっては、土地所有者木村　實氏（２－23窯跡）・桜井義勲氏・鹿島清吾氏（２－２窯跡）等の協力を得た。

５．調査の進行等について、豊中市文化財保護委員鳥越憲三郎氏・同藤澤一夫氏・同鹿島友治氏から指導および助言を受けた。



第1図　桜井谷窯跡群分布図

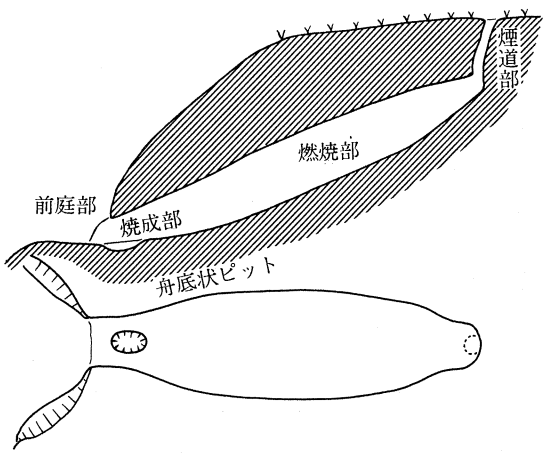
Ⅰ　桜井谷窯跡群範囲確認調査

桜井谷窯跡群の研究史は明治20年代にそのはじまりがあるものと考えられる。古墳の研究で有名なイギリス人ウィリアム・ゴーランドはその著—The Dolmen and Burial Mound in Japan—の中で、古墳から出土する陶棺について触れ、摂津桜井谷出土の陶棺を写真入りで資料としてあげている。また同書中には須恵器の生産遺跡を３個所調査したことを記録している。この場所は“摂津”と記すのみであるが、桜井谷の古墳の調査にともなって窯跡の調査を行なったと考えることができる。恐らく桜井谷窯跡群中のいずれかの窯跡であったと考えられる。

明治20年代に記録されてから、80年を経過した現在、千里丘陵の様相は大きく変貌し、その開発もほぼ終了しようとしている。この渦中にあって桜井谷窯跡群もほぼ全壊に近い状態になっている。かつて数十個所を数えた窯跡にともなう土器の散布地は、これまで約５基が調査され、このうち３基が保存されている。残りの数十個所の窯跡については全く未調査のまま破壊され、何等の記録も残されていない。

今回の確認調査は、このような現状の窯跡群に対して、残る数個所の窯跡土器散布地にトレンチを設定し、窯体の保存状態・これにともなう灰原の広がり・その年代などを調査し、今後の資料を得ようとするものである。調査対象として選んだ場所は、開発の近づいている窯跡で、土地所有者の承諾の得られた所で以下に記す。

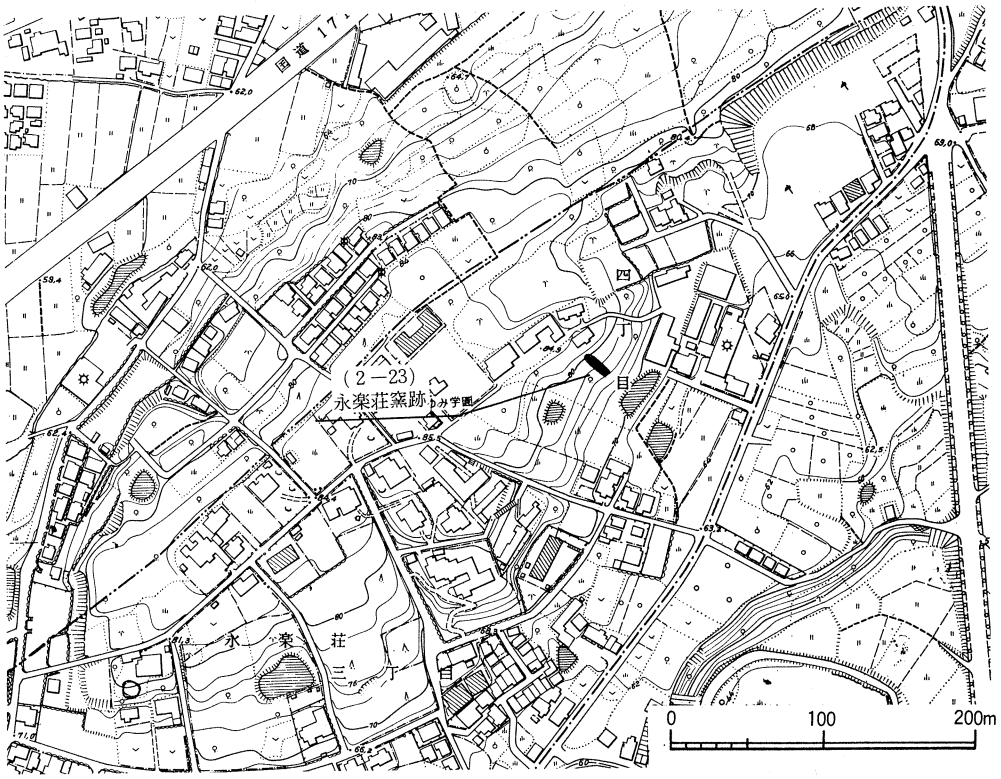
２—23窯跡（永楽荘窯跡）
２—10窯跡（新池北畔西窯跡）
２—２窯跡（下地蔵岡窯跡）
※２—は豊中市遺跡分布図中の桜井谷窯跡群の番号で枝番は個々の番号を示す。



第２図　登り窯模式図

Ⅱ　2－23窯跡（永楽荘窯跡）

桜井谷窯跡群では北方に位置する窯跡で、千里川の右岸の箕面市との境界をなす尾根の東南斜面にある。この尾根上にはウィリアム・ゴーランドが調査したたこ塚古墳群が存在した。窯跡は現在山林として残っているが、その斜面の両側及び上下平坦面はすでに開発され、宅地化されている。山林内には黒色の灰原が広く露呈しており、各所に盗掘穴がみられる。灰原は幅30m に分布し、厚い所では80cmをはかり、平均50cm位には堆積しているものと考えられる。灰原の分布は上方に行くにつれて狭くなり、この中心部と考えられる部分に扇形の平坦面がみられる。この平坦面から上方斜面への移行点に第１トレンチを設定した。窯体部へのトレンチはこれより上方斜面に３個所、計４個所のトレンチを設定し、窯体の中心線とその保存状態・構造などの大様を知ることができた。この他のトレンチは、灰原中心の前庭部と考えられる平坦面に１個所と、灰原に２個所方形のトレンチを設定し、計７個所のトレンチを掘った。



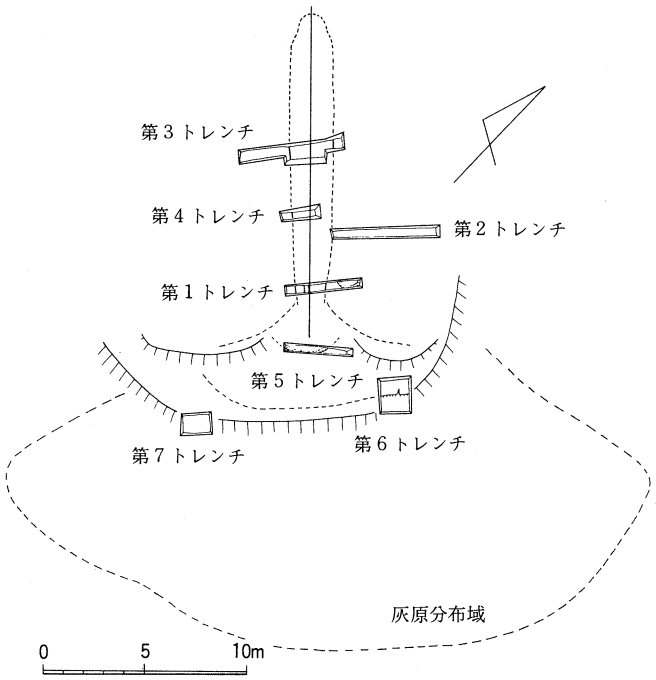
第３図　２－23窯跡付近の地形

第１トレンチ　幅50cm・長さ４ｍのトレンチである。表土層下は赤褐色の粘質土であり、焼け土を含むものである。トレンチの右側には凹状の落ちこみがあり、内部には厚い所で35cmの黒色灰が充満している。この落ちこみは溝状のものではないようである。左側に窯体が検出された。側壁は高さ60cm残っており、左側壁に還元層がみられるが、右側壁のものは剥落していた。床面は地山黄白色の粘土層で、この中央に幅25cm・深さ10cmの溝状の落ちこみがみられた。窯体内部に設けられた排水溝であると考えられる。

このトレンチにおいて検出した窯体は床面に還元層のない事や、床面に黒色灰が堆積していることなどから焚口部分又はこれに近い部分であると考えられる。

第２トレンチ　第２トレンチでは、表土を剥ぐとすぐに赤褐色の粘土層があり、遺物等についても全く出土しなかった。旧地形は窯から遠ざかるにつれて下がっている。

第３トレンチ　幅60cm・長さ３ｍのトレンチを設定したが、窯体が予想以上に良く残っており、深いため幅を1.2m に拡張して調査した。現地表面から床面までの深さは2.5m あり、左側壁をすべて検出した。側壁の床面からの立ち上がりは1.3m 直立してあり、カーブして天井部に移行している。当初の天井から床面までの高さは1.5m を十分越えるものであったと考えられる。右側壁は一部を検出したのみであるが、窯の幅は2.2mをはかる大きなものである。断面形はほぼ正方形を呈するような状態になるが、窯体の中心焼成部の形状であろうと考えられる。側壁還元層は25cm・酸化層も30cmをこえる。床面は固く焼き締まっており、斜面角度は38度位であろう。床面は左半部 1.3×0.4mを検出したのみであるが、



第４図　２－23窯跡トレンチ位置図

この床面には大甕片や杯などがみられ、とくに杯は整然と並べられていた。甕は天井の落下によって壊れているため、元の位置は不明であるが、杯は蓋と身を合口にセットし、狭い範囲に十数個体みられた。多い所では3段に積み上げている。これらの土器の上には天井落下物である還元壁塊が密接し、ほとんど締まらずに空間をもって堆積している。

床面の土器の出土状態などからみて、土器の焼成中に天井部が剝落又は落下したものと考えられる。床面の遺物については、杯セット5点と若干の土器細片を取り上げ、他は埋めもどし、出土状態を保存した。

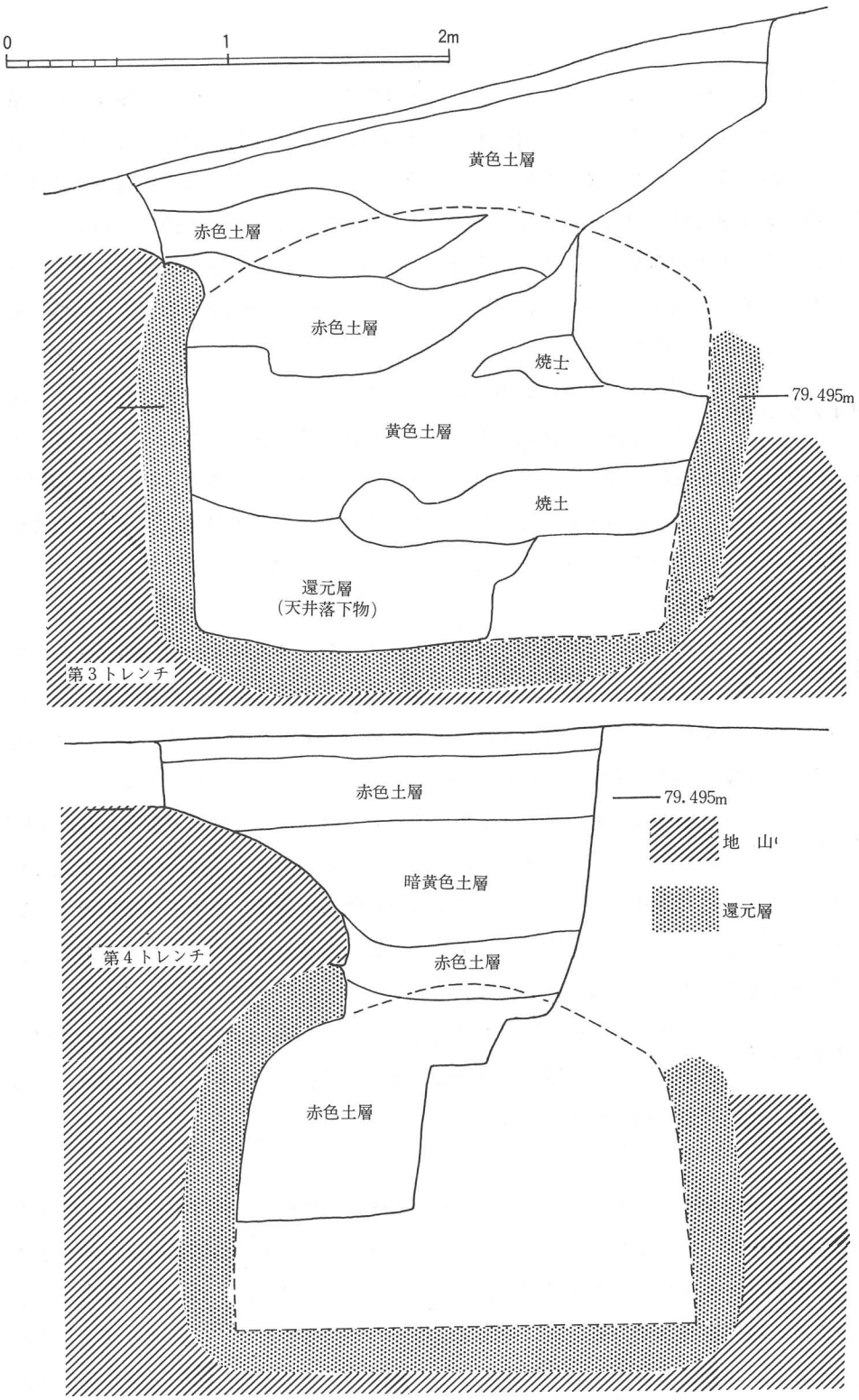
第4トレンチ　幅60cm・長さ2mのトレンチである。小さいトレンチであるため、床面までの検出が困難であった。側壁は左側を検出したのみであるが、天井部への移行状態を良好に残していた。側壁は70cmの立ち上がりが認められ、若干内傾する点が、第3トレンチのものと異なる。焚口に近づくにつれて若干のすぼまりをみせる部分の壁の形状であると考えられる。床面は第3トレンチとの関係からみれば、さらに下方にあるものと考えられる。

第5トレンチ　現地形から前庭部と判断できる部分に設けた幅50cm・長さ3.5mのトレンチである。表土及び黄色土を取り除くと黒色灰層がみられた。灰層は厚さ60cmに均一に堆積しており、分層することは不可能であった。地山は赤褐色の粘土層で、窯体方向に中心をもつ弧形に深さ20～30cmの落ちこみを呈するようである。

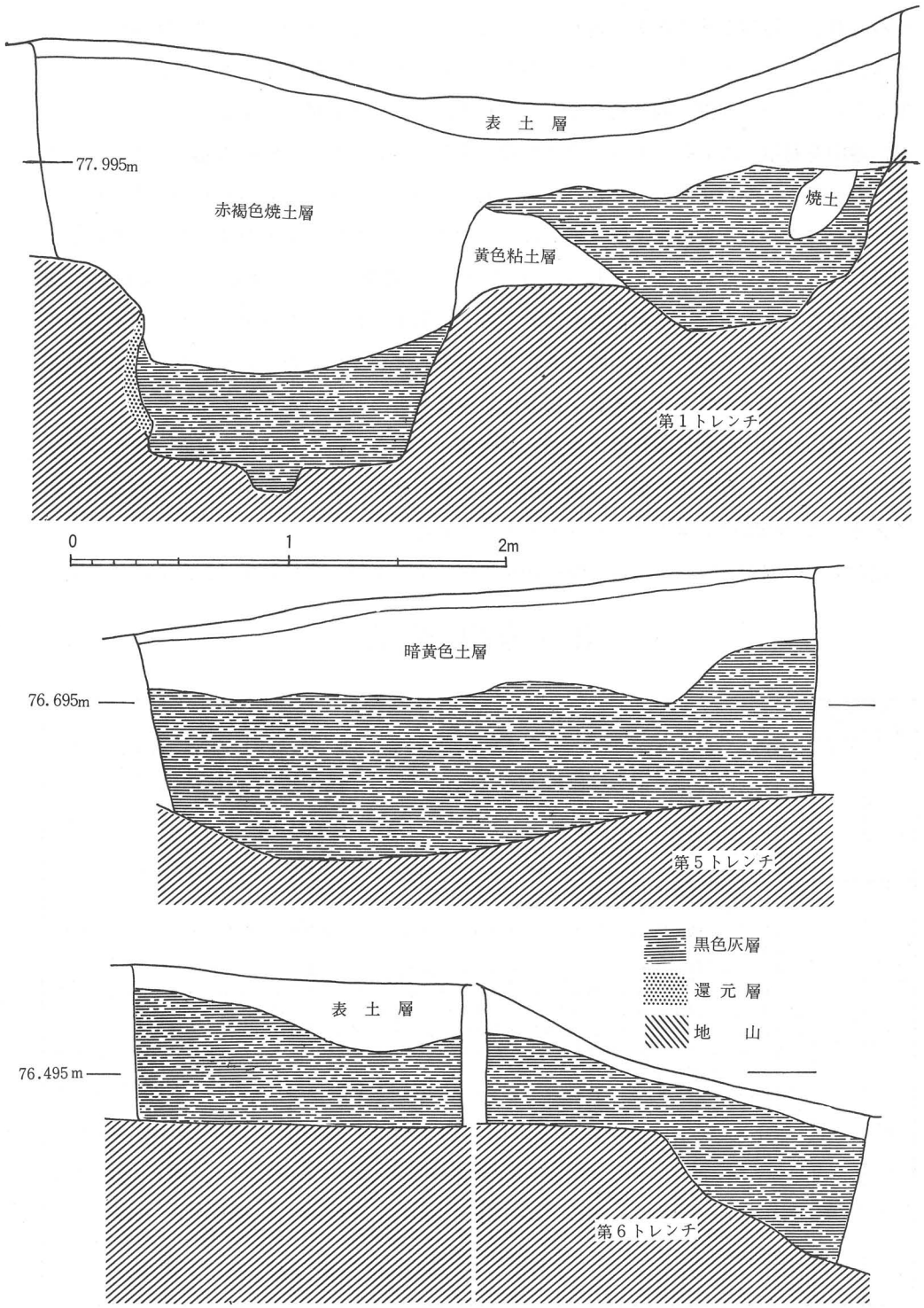
第6トレンチ　前庭部と考えられる平坦面の右側、斜面に移り変わる部分に1.5m×1.8mの方形のトレンチを設定した。表土を剝ぐとすぐに黒色灰層があらわれ、厚さは平均50cmに堆積している。地山である赤褐色粘土層は、上半部が平坦面で、第5トレンチ地山面と同じレベルとなる。下半部は斜面であり、灰原に続くものであろう。前庭部はかなり広いものであったと考えられる。

第7トレンチ　窯体の左側の灰原斜面に設定した。表土下には厚さ40cmの灰の堆積がみられた。この層は黒色灰層と焼土が互層となっており、3回位の堆積がみられた。地山は黄白色の粘土層で斜面になっている。

永楽荘窯跡は山林として残った所であり、現代の地形変化を全く受けていない。現在斜面は幅60m位で残っているが、この中央に小高い部分がみられる。この部分は右側が小さな谷状の凹みで区画され、左側は斜面が奥へ続く地形となっている。この高まりの中央の少し左よりに窯が築かれている。窯の前面には扇形の平坦面があり、前庭部と考えられる。第5・第6トレンチの観察では、平坦面及びこの前面の斜面には均一に50cm位の灰の堆積



第5図　2－23窯跡トレンチ断面図(1)



第6図　2－23窯跡トレンチ断面図(2)

がみられ、旧地形がそのまま現地形としてあらわれているようである。窯の構築法については、第3トレンチにみられたように地表面下床面までが2.5mと深いものであることや、第4トレンチの天井部の残り具合などからみて、地山に穴を掘った地下式のもので、天井部は地山を利用したものであったとされる。第1トレンチでは右側に灰溜の落ちこみがあり、この落ちこみの窯側のカーブが、ほぼ天井部のカーブを示しているものと考えられた。この部分にみられた黄色粘土層は地山のものではなく、焚口付近天井は、掘りこみの上に架設したものであったと考えられる。これらのことから窯は前方焚口付近を半地下式に、後方焼成部などは地下式に構築したものであろう。第1トレンチから第3トレンチまでの平面距離は7.5mであるが、窯体の確実な長さは検出していない。おそらく、煙道部までの長さはこの倍近くはあると考えられ、15m位の規模をもつものであろう。

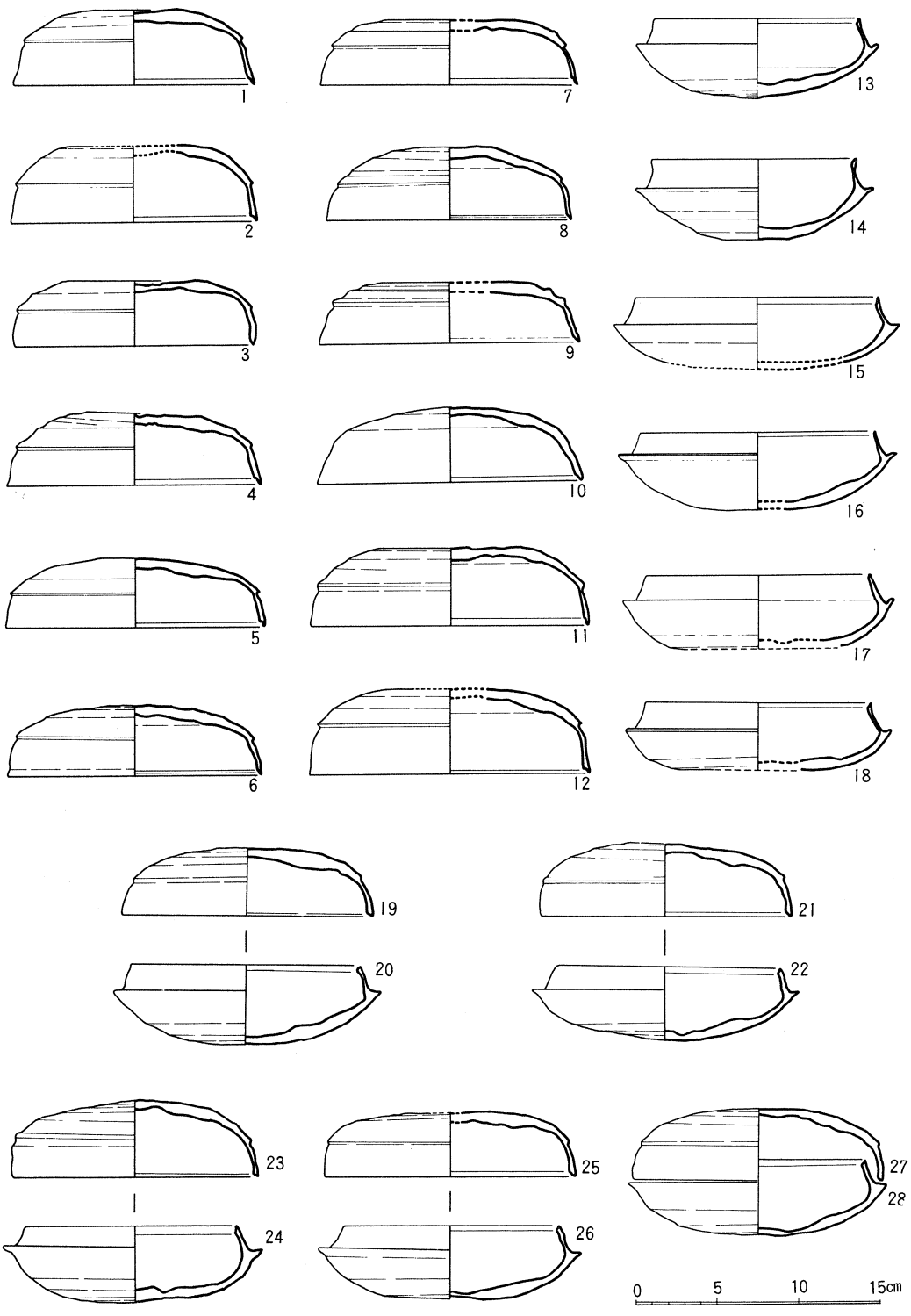
この窯の時期は桜井谷窯跡群の中でも最盛期にあたるものと考えられるが、第3トレンチの断面にあらわれた正方形状の窯の形はこの後の時期の窯の調査例では見られないものである。この時期の大量生産ぶりを示すものであろう。

現在までの調査記録中では最も保存状態の良い窯であり、規模もすぐれたものである。

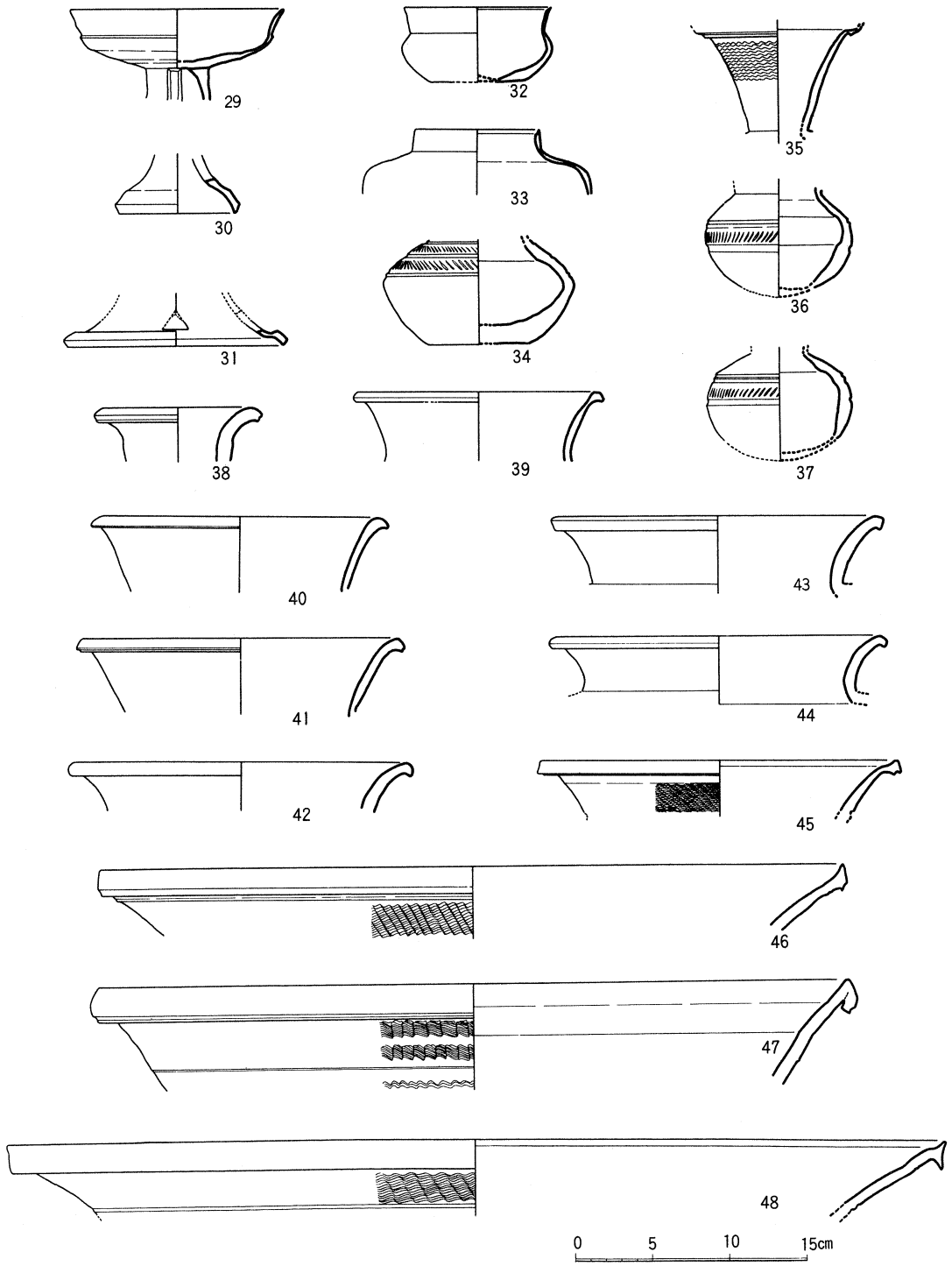
出土遺物一覧表

土器番号	器形	所見
1	杯蓋	口径15cm。稜径13.6cm。器高4.8cm。天井部と口縁部を分ける綾は短く鋭さに欠ける。口縁部は外方へ開き、器高に比して長い。口縁部内面に段を有す。胎土は荒く、砂粒を多く含む。焼成は良好である。天井部の⅔に右まわりのヘラ削り、内面には直線的な仕上げナデを、その他の内外面にはヨコナデを行なう。天井部中央にヘラ記号（一）がある。
2		口径15.3cm。稜径14.8cm。残存高4.8cm。天井部は丸く盛り上がる。ヘラ削りは左まわり。
3		口径15.1cm。稜径14.6cm。器高4.1cm。天井部と口縁部を分ける稜は鈍く、ほとんど外方へ突出しない。口縁部はやや内弯し、内面の段は消失する。天井部は扁平で若干歪む。ヘラ削りは左まわり。
4		口径15.8cm。稜径14.6cm。器高4.6cm。口縁部は外反し、内面に段を有す。ヘラ削りは左まわり。天井部にヘラ記号（一）がある。
5		口径16.1cm。稜径15.4cm。器高4.4cm。天井部と口縁部を分ける稜はやや突出し、内面の段は深く明瞭。ヘラ削りは左まわり。
6		口径15.8cm。稜径14.7cm。器高4.5cm。焼成不良。天井部の⅔に右まわりのヘラ削りを行なう。
7		口径16.2cm。稜径14.4cm。器高3.9cm。口径と稜径の差が大きい。天井部に2条の凹線を廻らす。天井部内面に同心円文が残る。ヘラ削りは左まわり。二次焼成をうけているようである。
8		口径15.2cm。稜径13.9cm。器高4.6cm。天井部は丸く盛り上がる。ヘラ削りは左まわり。
9		口径16cm。稜径14.6cm。残存高4.1cm。口縁部の器壁は天井部に比してかなりうすい。器表に自然釉がかかる。ヘラ削りは左まわり。
10		口径16.5cm。器高4.7cm。天井部と口縁部を分ける綾は消失する。内面に同心円文が残る。ヘラ削りは左まわり。天井部にヘラ記号がある。
11		口径17.3cm。稜径16.5cm。器高4.9cm。口径はかなり大型化する。天井部と口縁部の境は鈍い稜をなす。ヘラ削りは左まわり。
12		口径17.4cm。稜径16.4cm。残存高5.3cm。天井部と口縁部を分ける稜は鋭く短かい。器表は焼成良好でツヤあり。ヘラ削りは左まわり。
13	杯身	口径12.6cm。受部径15cm。器高5.1cm。たちあがりは長く、やや内傾する。端面は内側へ傾斜し浅く凹む。受部は外上方にのびるが、端部の稜はあまい。底部は丸く、ヘラ削りは底部全体の⅔弱で、削りの方向は右まわりである。重ね焼きの痕跡が残る。
14		口径12.7cm。受部径14.7cm。器高5.1cm。たちあがりは内傾した後、肥厚しながら上方に伸びる。底部は丸く深い。口縁端部に重ね焼きの痕跡がある。ヘラ削りは左まわり。

土器番号	器形	所見
15		口径14.9cm。受部径17.6cm。残存高4.1cm。器径は大型化する。底部全面にヘラ削りを施したものと思われる。削りの方向は左まわり。天井部に重ね焼きによる色調の変化がある。受部はほぼ水平にのびる。
16		口径14.5cm。受部径17.3cm。残存高4.8cm。ヘラ削りは左まわり。端部は鋭く仕上げている。
17		口径13.8cm。受部径16.7cm。残存高4.5cm。体部にたちあがりを貼付した痕跡がみられ、内面に同心円文が残る。焼成はやや不良。
18		口径13.9cm。受部径16.4cm。残存高4.2cm。たちあがりの内傾度は大きく、底部は浅く扁平である。ヘラ記号（一）がある。仕上げは荒く、器表は剝離している。ヘラ削りは左まわり。
19	杯蓋	口径15.5cm。稜径15.1cm。器高4.2cm。天井部と口縁部を分ける稜は鈍くほとんど突出しない。口縁端部はほぼ扁平である。焼成はやや不良で大きく歪む。天井部全面にヘラ削りを行なう。ヘラ削りは右まわりに中心から4周廻らす。内面に同心円文が残る。
20	杯身	口径14.1cm。受部径16.5cm。器高5cm。19とセットである。底部ほぼ全面にヘラ削りを行なう。ヘラ削りは19と同じ。受部は水平にのびる。底部内面の中央からややはずれたところに同心円文が残る。
21	杯蓋	口径15.4cm。稜径14.9cm。器高4.6cm。胎土に大きい白色砂粒を含み、焼成は不良。天井部の⅓強にヘラ削りを行なう。ヘラ削りは右まわりに4周廻らす。口縁端部でやや内弯する。
22	杯身	口径13.6cm。受部径16.5cm。器高4.6cm。21とセットである。たちあがりはやや短くなる。底部内面にわずかに同心円文が残る。ヘラ削り21と同じ。
23	杯蓋	口径15.2cm。稜径14.6cm。器高4.8cm。胎土に砂粒を多く含む。口縁部に歪みがみられる。天井部と口縁部を分ける稜は鈍く、不明瞭な凹線が廻る。ヘラ削りは右まわりに4周。
24	杯身	口径13.1cm。受部径16.1cm。器高4.8cm。23とセットである。たちあがりは内傾度を増す。受部は大きく外上方にのびる。内面に同心円文が残る。ヘラ削りは23と同じ。
25	杯蓋	口径15.6cm。稜径15cm。器高4.1cm。器高は低く、天井部はやや扁平である。口縁端部がやや肥厚する。ヘラ削りは右まわりに3周半廻らす。
26	杯身	口径13.3cm。受部径16.3cm。器高4.6cm。25とセットである。たちあがりは部端25の口縁端部と同様肥厚する。ヘラ削りは25と同じ。
27	杯蓋	口径13.9cm。稜径14.6cm。器高4.5cm。口縁端部はやや内弯し、丸く仕上げている。ヘラ削りは右まわりに4周廻らす。
28	杯身	口径13.1cm。受部径15.8cm。器高4.7cm。27とセットである。底部全面に右まわりのヘラ削りを4周廻らす。
29	高杯	口径13.9cm。無蓋高杯である。脚部の透しは3方に開けられている。脚部残存部にカキ目が施されている。
30		脚部のみ。脚径8.2cm。内面の焼成は不良。
31		長脚高杯の脚部である。脚径14.5cm。裾部は外方へ大きく開き、三角形の透しをあける。
32	椀	口径9.6cm。口縁部はゆるく外反し、内面に段をもつ。肩部は張り、底部はほぼ扁平である。器表に自然釉がかかる。
33	壺	有蓋短頸壺である。口径8.1cm。器壁はうすい。頸部に蓋を重ねて焼いた痕跡が残る。
34		平底の壺である。肩部に櫛描き列点文を2条廻らす。
35	甕	頸部の半分に波状文を廻らす。
36		口頸部は欠失している。胴部中央に2条の凹線に挟まれて、1条の櫛描き列点文を、底部付近にカキ目を廻らす。内面にしぼり目がみられる。
37		口頸部は欠失している。胴部の上半部に3条の凹線と1条の櫛描き列点文を、下半部にカキ目を施す。
38	壺	復元口径11cm。口径に比して器壁は厚い。口頸部は短かく外反度は大きい。
39		復元口径16.4cm。口縁端部は肥厚する。
40	甕	復元口径19.3cm。焼成不良。
41		復元口径21.4cm。頸部にカキ目を施す。頸部と胴部の境と思われるところに1条の凹線がみられる。
42		復元口径22.5cm。
43		復元口径21.7cm。口頸部内外面とも自然釉が付着する。
44		復元口径22cm。口縁端部は下方に肥厚する。
45		口頸部破片。復元口径23.7cm。頸部に荒いヨコナデを施した上に、波状文を廻らす。口唇部下端に、1条の凹線を廻らす。
46		口頸部破片。復元口径48.9cm。口縁端部は直立する。口頸部に波状文を廻らす。
47		口頸部破片。復元口径49.9cm。口唇部に1～2条の凹線を、頸部に3条の波状文を廻らす。口縁端部は、折り曲げて肥厚させている。
48		口頸部破片。復元口径61.3cm。頸部に細かい波状文を廻らす。内面の一部に同心円文が残る。

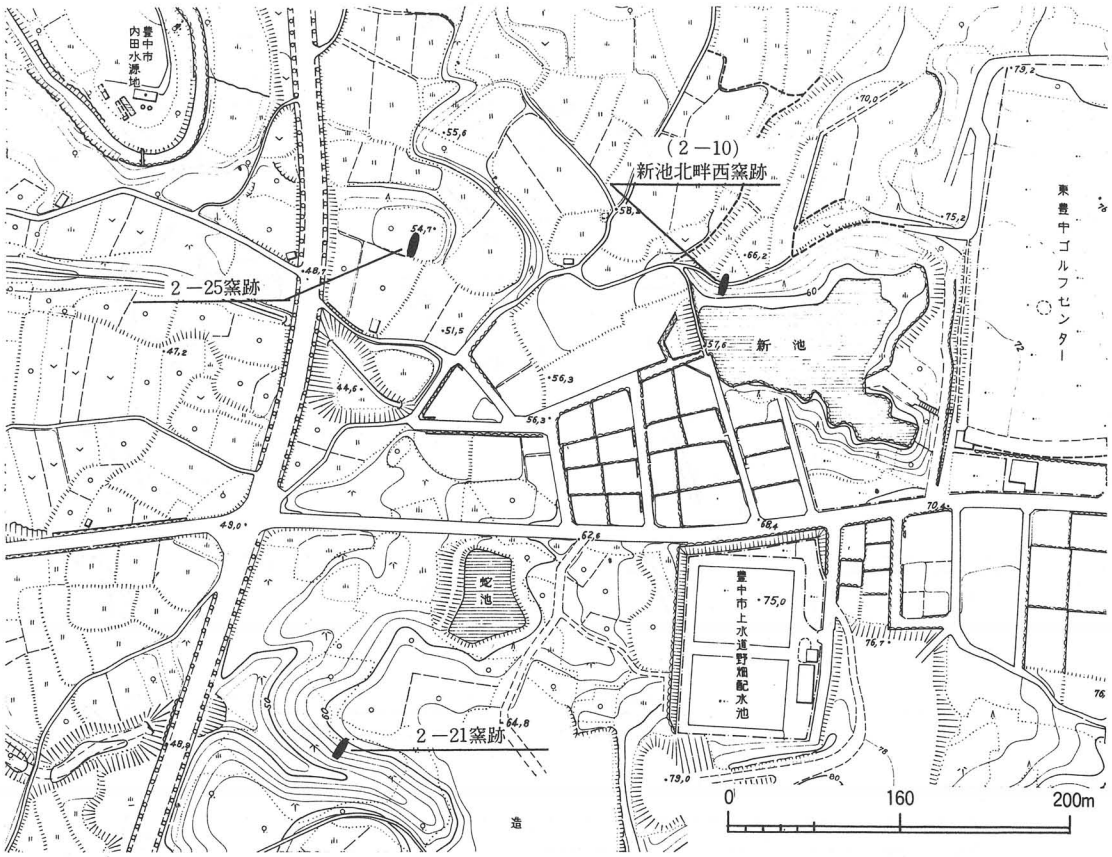


第７図　２－23窯跡出土遺物実測図(1)

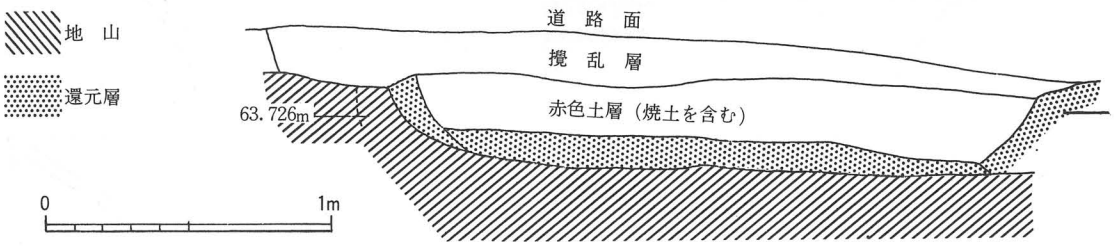


第8図　2－23窯跡出土遺物実測図(2)

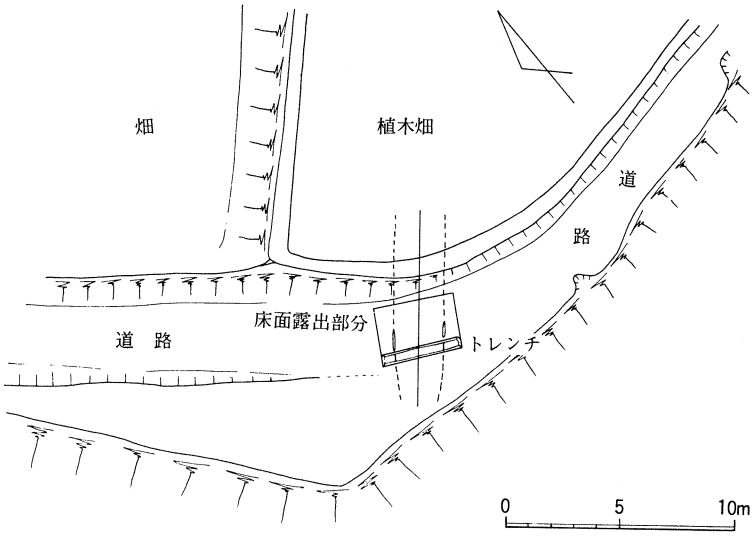
Ⅲ　２－10窯跡（新池北畔西窯跡）



第９図　２－10窯跡付近の地形



第10図　２－10窯跡トレンチ断面図

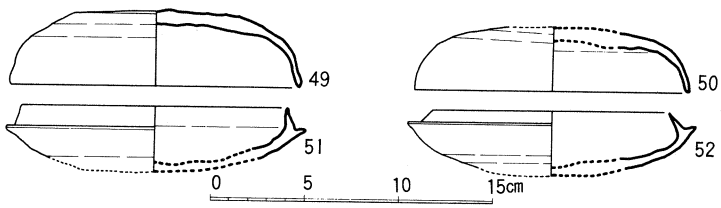


第11図　２－10窯跡トレンチ位置図

新池北畔の西端に位置する窯跡である。桜井谷の高位段丘斜面に造られた窯であり、上方は平担面、下方は現在池となっている。窯は段丘面から斜面に移り変わる部分にある。調査地点は新池北畔段丘面に堀りこまれた道路部分で窯跡特有の焼け土が露出していた。道路の谷側に設けたトレンチは幅50cm、長さ3.5mのもので、深さ40cmで窯の床面に達した。山側では数cmの表土を除けば床面が出るといった状態であった。道路面に露出した壁の状態は６cmのスサ入り還元層とこの外に７cmの白色から黄褐色の固化層・10cmの赤色酸化層となっている。地山は礫層であり、赤色酸化層となり、この前の固化層・還元層は壁として貼り付けられたものと考えられる。

出土遺物一覧表

土器番号	器形	所見
49	杯蓋	口径15.7cm。器高4.1cm。天井部と口縁部を分ける凹線や稜は全くみとめられない。口縁端部は丸く仕上げている。天井部全面に左まわりのヘラ削りを、内面にナデ、口縁部内外面共にヨコナデを行なう。胎土は白色砂粒を含み、焼成は良好である。
50		復元口径14.8cm。残存高3.3cm。器高は低く、整形は49と同じである。
51	杯身	復元口径14.3cm。受部径16.1cm。残存高2.8cm。たちあがりは短かく、各端部のつくりは丸い。ヘラ削りは左まわり。
52		復元口径12.7cm。受部径15.5cm。残存高3.1cm。たちあがりの器壁はうすく、内傾度は大きい。

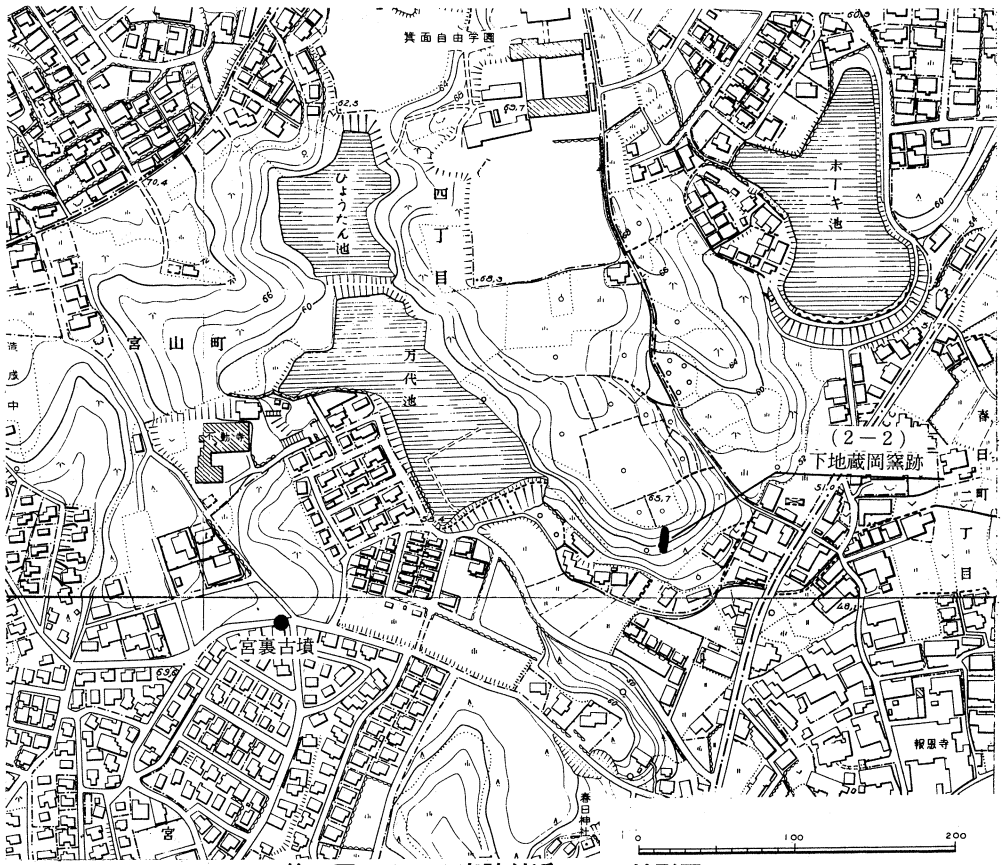


第12図　２－10窯跡出土遺物実測図

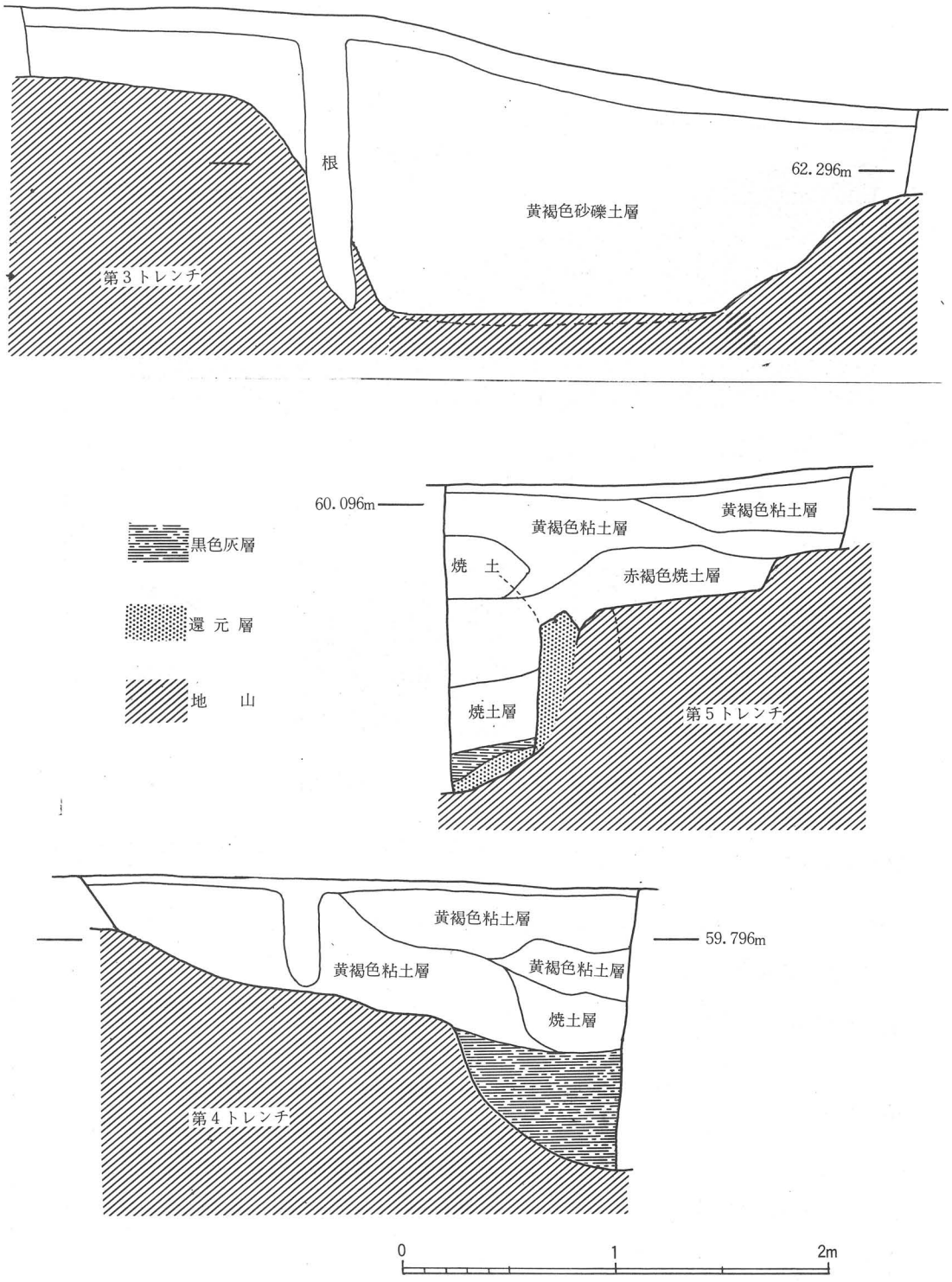
Ⅳ　2－2窯跡（下地蔵岡窯跡）

千里川の左岸、箕面街道より北西部には永楽荘窯跡からつづく丘陵があり、この丘陵の谷を堰き止めた万代池の東側に見られる窯跡である。万代池の北東畔は南東方向に突出した形となっているが、窯はこの突端部の斜面を利用して築かれている。現在、窯跡の位置は明治時代頃に作られた野畑報恩寺の墓地となっており、この時に一部が造成され、焼土などが表土として散乱している。墓地は5m×5mの方形に斜面を削ったもので、この掘削土は前面に持ち出して平担面としている。この方形掘削部の東面に窯体が露出している。窯は地表下1mで赤色酸化層があり、この下に固化層・青灰色の還元層がみられる。

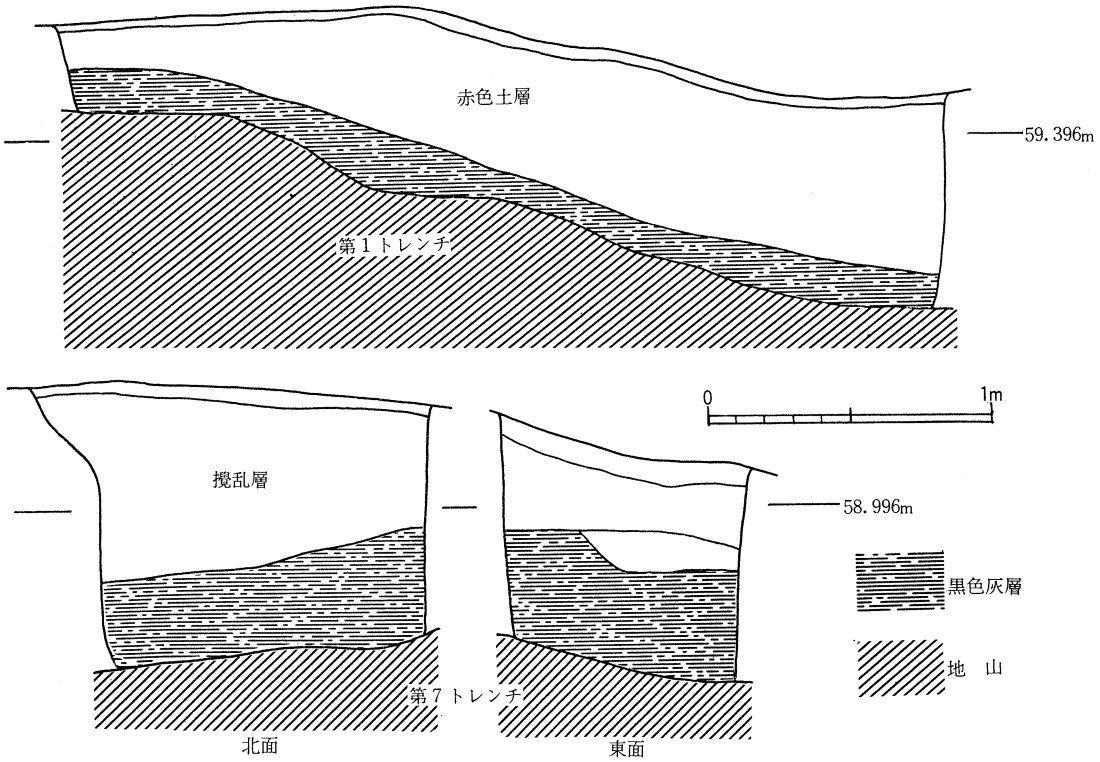
窯跡部の斜面は比較的ゆるやかなもので、この斜面に第1～第8のトレンチを設定して旧地形などについての資料を得ることにつとめた。



第13図　2－2窯跡付近　　の地形図



第14図　２－２窯跡トレンチ断面図(1)



第15図　２－２窯跡トレンチ断面図(2)

第１トレンチ　方形石囲いの墓地の前面は平担面となっているが、この西側の斜面への移行点に設けた幅50cm・長さ３ｍのトレンチである。厚さ50cmの腐蝕土層下は赤色になった焼土混りの粘土層であり、この下に10～15cmの黒色灰層がある。灰層下は地山で、黄褐色粘土層である。

第２トレンチ　腐蝕土層下すぐに地山黄褐色粘土層を検出したのみで、灰層は検出できなかった。

第３トレンチ　墓地石囲いの北東部上方に設けた幅50cm・長さ５ｍのトレンチである。表土層下は黄褐色の粘土混りの礫層で、この礫層が窯体中心軸付近で落ちこんでいた。落ちこみは幅２ｍ・深さ１ｍのもので、礫層下黄白色粘土層に達し、この中央底部に赤色酸化層が検出された。しかし、窯体の形は全くないことから、この付近の窯体はすでに流れ去っているものと考えられた。

第4トレンチ　墓地石囲い前面の平担部に設けた幅50cm・長さ2.5mのトレンチである。表土下の地山は黄白色粘土層で窯の中心軸方向に落ちこみが検出された。落ちこみの深さは80cmあり、この中に厚さ55cmの黒色灰の推積がみられた。落ちこみの壁は地山の土そのもので還元層はもちろん酸化層も検出されないため窯体には至らない部分であり、平面形が斜め前方に扇形に広がっていることから前庭部と考えられる。

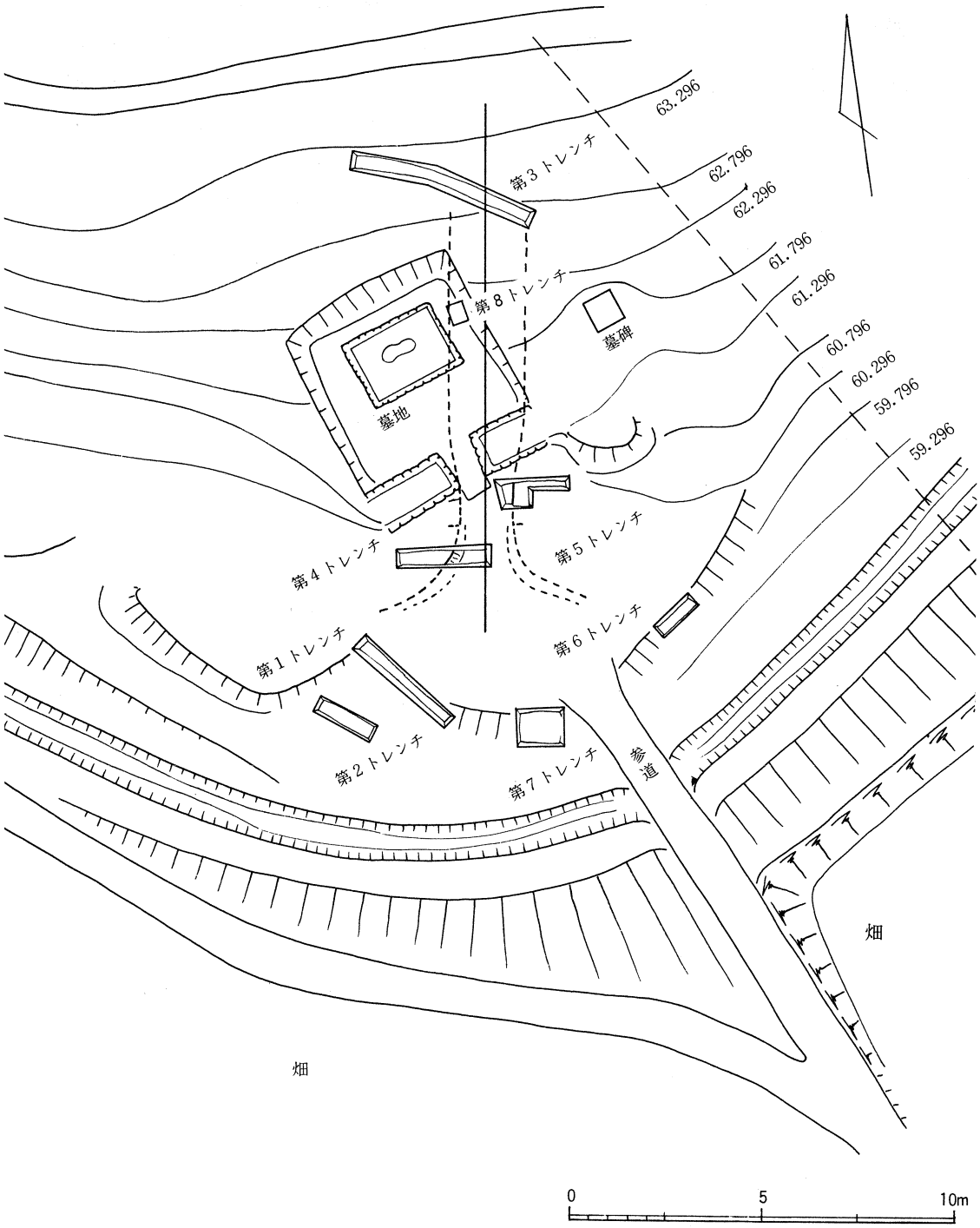
第5トレンチ　第4トレンチ山側に設定したトレンチで、窯体右側壁が検出された。壁は8cmの還元層があり、この下に白色の固化層・赤色酸化層がみられる。還元層・白色固化層は地山の上に貼られたものである。高さ60cm残っていた。下面には床面特有のバラツキの多い還元層がありこの下には赤色酸化層が認められた。壁の状態はあまり焼け具合が良くないため、焚口にあたる部分と考えられる。

第6トレンチ　旧表土層の上には、墓地造成時の盛土である赤色酸化層などの崩壊土がみられ、地山黄白色粘土層となる。

第7トレンチ　窯体中心軸前庭部前端と考えられる部分に設けた方形のトレンチである。表土下には造成時の攪乱層があり、旧表土の下すぐに黒色灰原がみられた。灰層は厚さ40cmに推積しており、この下は地山黄白色粘土層となる。

第8トレンチ　墓地石囲いの東側、窯体の露出した部分の調査地区である、若干の還元層を取り除くと左側壁が検出された。還元層は厚さ20cmをはかるもので、天井を一部遺存しているものとも考えられた。左側壁は下方につづいているが、制約された部分での調査のため床面の検出には及んでいない。

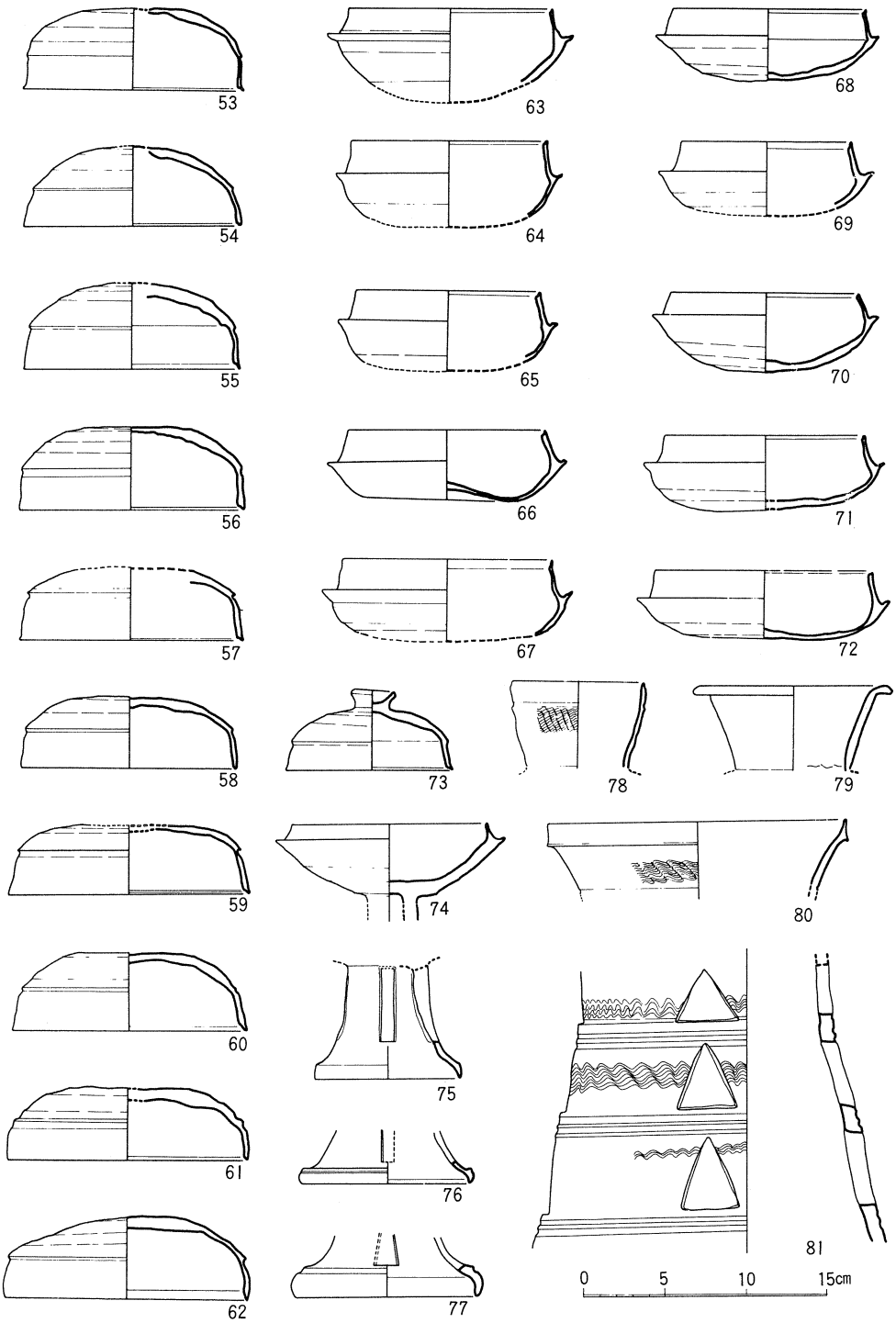
2－2窯跡では以上の8ヶ所のトレンチにおいて窯体及び灰原の遺存状態を調べた。窯の焚口は第4及び第5トレンチの間にあると考えられ、窯体は墓地内の第8トレンチに続いている。さらに窯体は第3トレンチに続いていると考えられるが、すでに上部構造が流失して、床面下の赤色酸化層が認められたにすぎない。焚口前の状態は第4トレンチから第1・第7トレンチにかけてが平担であり、前庭部と考えられ、さらに前方の斜面につづいている。灰原は前庭部から斜面に広がるもので、広い扇形になっているものと考えられた。一部南側の畑地造成時の壁面にも灰原が露出している。



第16図　２－２窯跡地形実測図

出土遺物一覧表

土器番号	器形	所見
53	杯蓋	口径13.7cm。稜径13.2cm。残存高5.1cm。天井部は丸く盛り上がり、口縁部は垂直に下降したのち、端部で外へ開く。器壁はうすく、全体的に鋭利なつくりである。天井部の大半にヘラ削りを行なう。ヘラ削りは左まわり。天井部内面中央に直線的な仕上げナデをその他の内外全面にヨコナデを行なう。胎土は荒く、大きな砂粒を含む。焼成良好。
54		口径13.4cm。稜径12.4cm残存高5cm。天井部はドーム状に盛り上がる。天井部の⅓弱にヘラ削りを行なう。削りの方向は左まわり。
55		口径13.3cm。稜径12.8cm。残存高5.3cm。天井部に比して口縁部の器壁はかなりうすい。天井部は丸く盛り上がる。口縁端部を鋭く仕上げている。天井部の⅓に左まわりヘラ削りを行なう。
56		口径13.9cm。稜径13.6cm。器高5.2cm。天井部と口縁部を分ける稜は不明瞭で、浅い凹線によって区分される。口縁部は肥厚しながら垂直に下降する。天井部のほぼ全面に左まわりヘラ削りを行なう。
57		復元口径13.8cm。残存高4.4cm。天井部と口縁部の境界はやや鋭く突出する稜をなす。ヘラ削りは左まわり。
58		口径13.3cm。稜径12.9cm。器高4.5cm。口縁端部は丸く仕上げている。天井部に重ね焼きの痕跡と、ヘラ記号(×)がある。ヘラ削りは天井部の⅓弱に右まわりに行なう。
59		口径14.9cm。稜径13.7cm。残存高4.3cm。器高に比して口縁部が長い。ヘラ削りは左まわり。
60		口径14.4cm。稜径13.1cm。器高4.9cm。天井部と口縁部を分ける稜線は消失寸前である。口縁部は外方へ開く。重ね焼きの痕跡が残る。ヘラ削りは左まわり。
61		口径14.9cm。稜径14.1cm。残存高4.6cm。全体に丸いつくりで、口縁端部はやや内弯する。ヘラ削りの範囲は天井部の½強に狭まる。削り方向は左まわり。
62		口径15cm。稜径14.7cm。器高5.2cm。口縁部はやや内弯する。天井部にヘラ記号(一)がある。ヘラ削りは左まわり。
63	杯身	復元口径12.6cm。受部径15.3cm。受部に重ね焼きの痕跡が残る。
64		復元口径12.1cm。受部径14cm。全体につくりはうすい。たちあがりはほぼ直立する。受部は鋭く外上方にのびる。
65		復元口径11.4cm。受部径13.5cm。やや小型のつくりである。ヘラ削りは左まわり。
66		口径12.2cm。受部径14.9cm。器高4.5cm。たちあがりの内傾度はやや大きい。底部は歪み、ヘラ削りは右まわりである。
67		復元口径13cm。受部径15.6cm。たちあがりは非常に長い。全体につくりはうすく、各端部は鋭利な仕上げを行なう。ヘラ削りは左まわり。
68		口径13cm。受部径14cm。器高4.5cm。均斉のとれた形をしている。底部の⅓弱にヘラ削りを行なう。削りの方向は左まわりである。
69		復元口径11.6cm。受部径13.4cm。口縁部はかなり歪み、受部に重ね焼きの痕跡が残る。
70		口径11.7cm。受部径14.1cm。器高5cm。たちあがりはやや短かく内傾する。底部は丸く深い。ヘラ削りは底部の⅓強に左まわりに行なう。
71		復元口径12.5cm。受部径15cm。たちあがりは長く、底部は浅く扁平である。ヘラ削りは左まわり。
72		口径13.6cm。受部径15.8cm。器高4.3cm。底部は浅く、焼成は不良。ヘラ削りは左まわり。
73	蓋	高杯の蓋であろう。口径10.4cm。器高5.1cm。つまみ径2.8cm。天井部と口縁部を分ける稜は鈍い。口縁部はゆるく外方へ開く。焼成良好で器表に釉が付着する。天井部中央に中くぼみのつまみがつく。
74	高杯	有蓋高杯である。口径12cm。たちあがりは短かく、内傾するが、器壁は体・底部に比べ、うすくつくられている。底部に左まわりのヘラ削りを行なう。その他内外面に横ナデを行なう。焼成は不良で、生焼けの状態である。
75		脚部破片。脚径9cm。透しは4方1段透しである。カキ目を施している。
76		脚部破片。脚径10.9cm。長方形の透しを穿つ。カキ目とヨコナデ調整を行なう。
77		脚部破片。脚径11.9cm。裾部に一条の凹線を廻らす。三角形の透しを穿つ。
78	壺	直口壺の口頸部破片。口径8.1cm。カキ目の上に一条の波状文を廻らす。胎土は堅緻で、焼成は良好。器表に自然釉がかかる。
79	甕	口頸部破片。復元口径12.4cm。口縁端部は逆L字形をなす。頸部と胴部の接合痕が残る。残存部全面にヨコナデを行なう。
80		口頸部破片。復元口径18.5cm。口縁端部は上下に肥厚させる。頸部に波状文と凹線を廻らす。その他内外面にヨコナデを行なう。
81	器台	脚部破片。凹線と波状文を交互に配し、波状文の上に三角形の透しを穿つ。透しは縦に並ぶ。焼成は不良で生焼けの状態である。



第17図　２－２窯跡出土遺物実測図

V　まとめ

現在、桜井谷窯跡群は豊中市遺跡分布図に２番の遺跡として記録されており、この中に25の枝番を付して各々の窯跡を記録している。この分布図作成の資料としたものは、昭和36年に刊行された豊中市史である。この中では各窯跡の名称が、桜井谷に流れ込む支谷を堰き止めて作られている溜池を中心とした位置、または池のない所では、小字名をもって記録されている。しかし、現状の桜井谷は中心とされた池でさえ、影も形もなく消え去っているものがあり、一読したのみではその位置を理解することが困難になってきている。

地元の古老においてさえ小字名を明らかにできないような状態に変化している。恐らく数百年あるいは千年をも経過し、生活の中から生み出されてきた小字名が、たかだか十数年の間に消滅しようとしている。江戸時代から風景絶佳の地として有名であった〝鬼ガ谷（オニガタニ）〟は、その痕跡も認め難い状態であり、〝三蓋峰（サンガイノミネ）〟または〝島熊山（シマクマヤマ）〟と呼ばれた千里丘陵の最高峰は削り崩され、ここにあった〝孩童も大低は知れば〟と記されている〝傘松（カラカサマツ）〟、〝猿戻（サルモド）り〟と呼ばれた坂等々、数え切れない名称が消え去っている。さらに、野畑・内田・少路などの大字名さえ地図上では消滅している。

これが桜井谷窯跡群の現状であり、大正時代から笠井新也氏・桜井義彰氏らによって付された窯跡の名称と、現在の記録上の番号の間では若干の食い違や、重復を生じている可能性がある。ここでは、現在の番号と、研究史上の名称について記しておきたい。

２－２窯跡は、石仏を多く出土することが伝えられている土地で、小字名〝下地蔵岡（シモジゾウガオカ）〟と呼ばれている所にある窯跡で、下地蔵岡窯跡と呼ばれて来た。この名称については、桜井義彰氏の報文中に見ることができる。

２－10窯跡は、大正４年頃、笠井新也氏が灰原の一部を調査したことを記録されており、新池北畔窯跡と呼ばれている。その後、桜井義彰氏の報文中には、新池北畔西窯跡の名称がみられ、豊中市史から現在までこの名称が受け継がれて来ている。

２－23窯跡は、これまでの資料では下たこ塚窯跡の近くと考えられるが、畑に開墾されたことが記されている事から、２－23窯跡とは考えられず、現在の地名から、永楽荘窯跡と呼んで来た窯跡である。

これらの窯跡について、今回調査を実施したが、それぞれのトレンチ、特に灰原に設定したトレンチ等から、遺物が出土しており、それぞれの窯の年代を推定することができた。

これらの出土資料を概観すると、それぞれの窯は、２－２・２－23・２－10の順に年代

が新らしくなっている。２－２窯跡出土の杯は小型の形態を保つもので、２－23窯跡の杯との間に大きな差を有している。しかし、これらの杯も、杯身における立ち上がりや蓋の稜線などに退化現象がみられる。また、高杯においては、短脚のものもみられるが、長脚化直前のものも含まれている。これらの特徴を、泉北陶邑の出土資料の編年に照らし合わせると、Ⅰ期末からⅡ期初頭に位置付けすることができる。２－23窯跡の杯は、口径が最大になった時期のもので、これらの内面には　蓋・身とも同心円文を残すものがある。これらの特徴からⅡ期の前半期のものと考えられる。２－10窯跡のものは、すでに蓋の稜が全く消失した時期のもので、Ⅱ期の後半期のものである。

今回調査した窯跡は、出土遺物などから６世紀代のものと考えられるが、この時期が桜井谷窯跡群の最盛期でもある。桜井谷窯跡群は、現在のところⅠ期の末に生産が始まり、Ⅱ期から、Ⅲ期初頭まで続いた窯跡群であると考えられる。最近の資料ではⅢ期末あるいはⅣ期初頭のものが若干知られたが、前代のものから継続して操業されたものとは考えられない。今後、集積された資料をもとに、陶邑に最も近い地方窯跡群としての桜井谷窯跡群の土器編年などの作業を続けねばならないが、若干時期遅れの観がしないでもない。

参考文献

※笠井新也氏「摂津桜井谷に於ける古代製陶所の遺跡及びその遺物に就いて」（『考古学雑誌』５－11、大正４年）

※桜井義彰氏「摂津桜井谷窯址に就いて」（『考古学雑誌』７－３、大正５年）

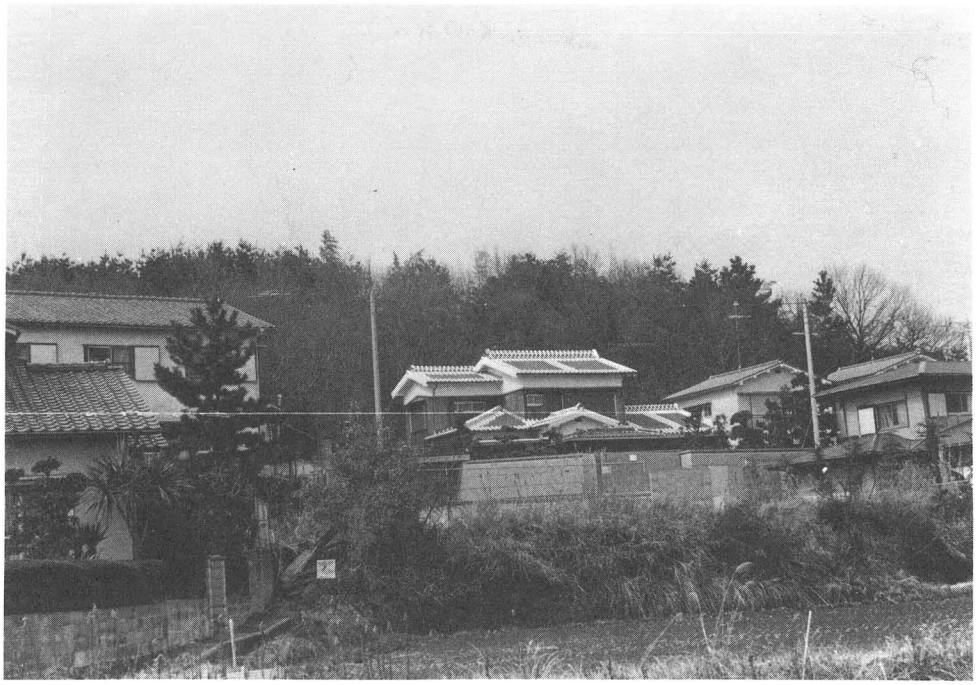
※藤澤一夫氏「古墳文化とその遺跡」（『豊中市史』第１巻、昭和36年）

※田辺昭三氏『陶邑古窯址群』（昭和41年）学園考古学クラブ

※大阪府教育委員会『陶邑Ⅰ』（昭和51年）

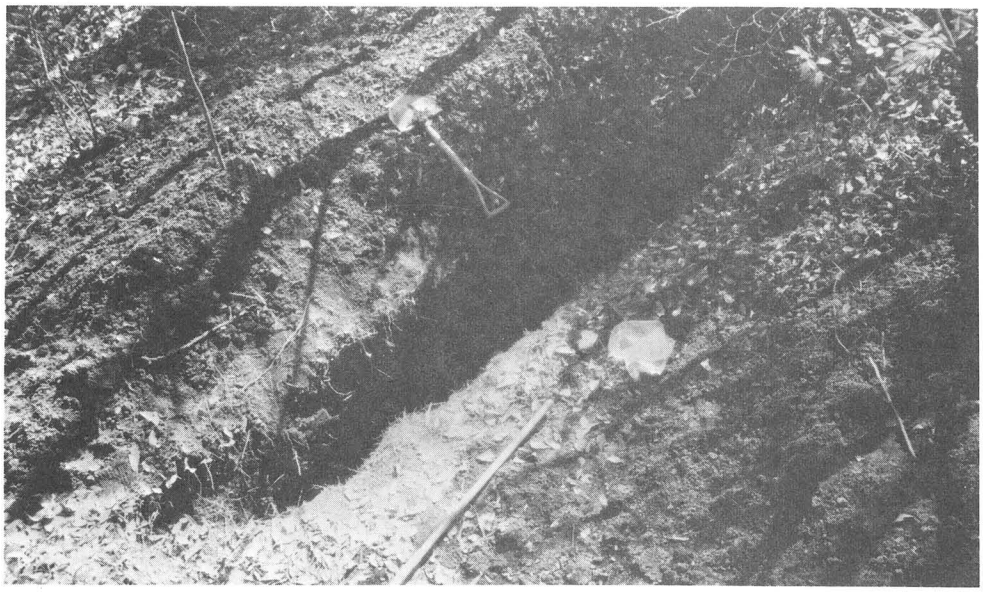
第18図　２－23窯跡調査風景

図版1　2－23窯跡遠景

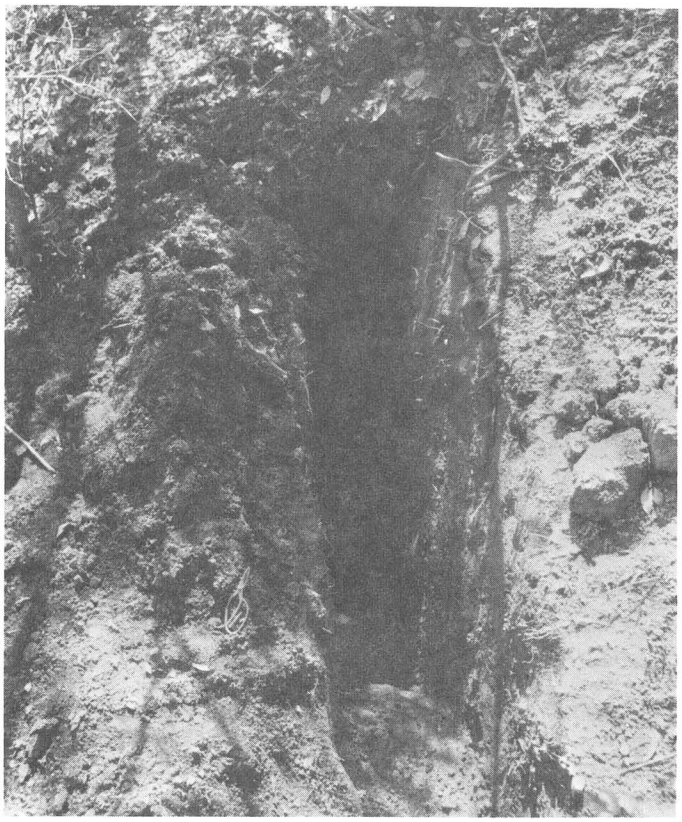


発掘地点の状態

図版2　2－23窯跡トレンチの状態

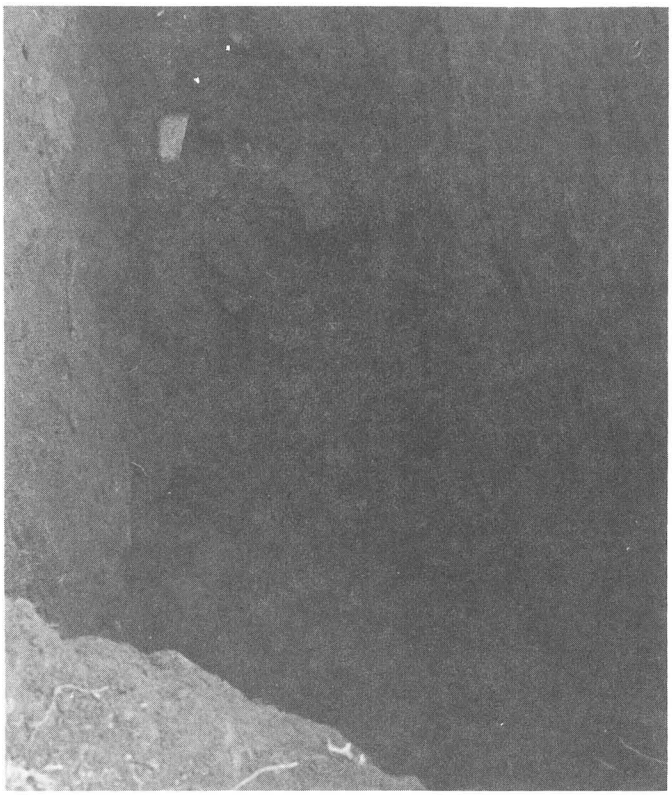


第５トレンチ



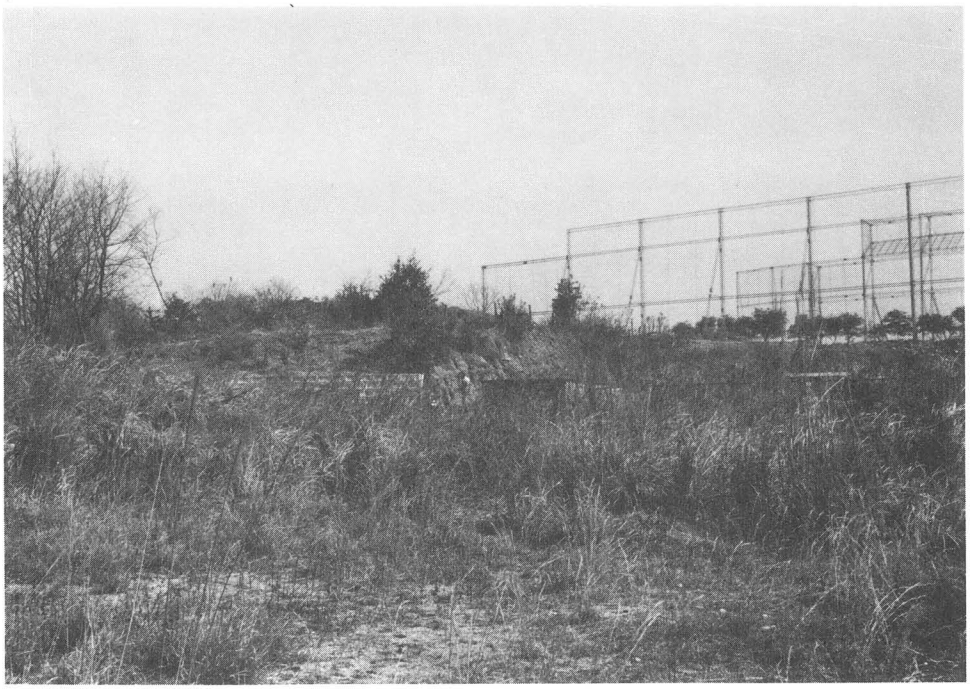
第１トレンチ窯体部

図版3　2－23窯跡第3トレンチ床面の状態

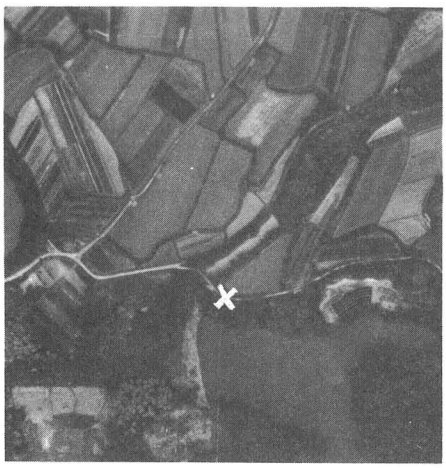


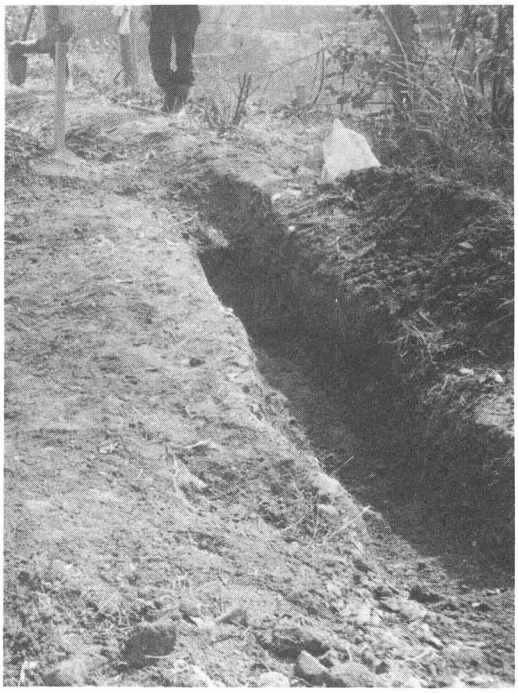
杯の重ね焼の状態

図版4　2－10窯跡遠景及びトレンチの状態



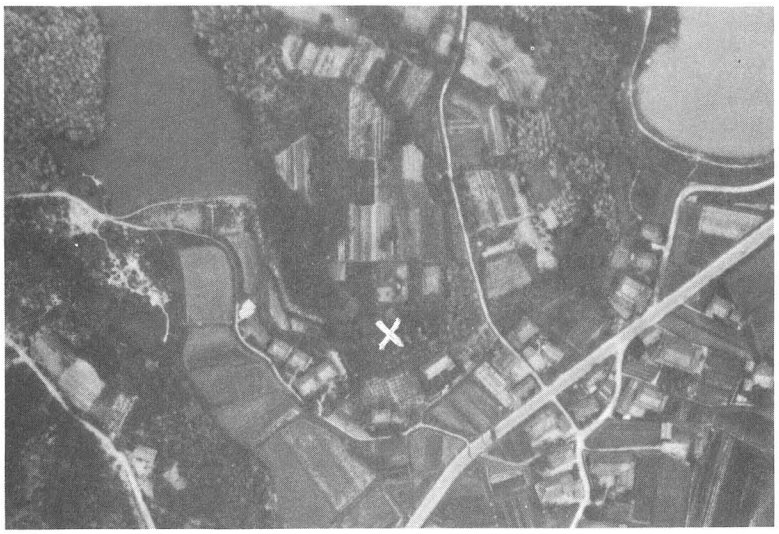
航空写真（S 31）上の窯跡の位置





図版5　2－2窯跡の位置及びトレンチの状態

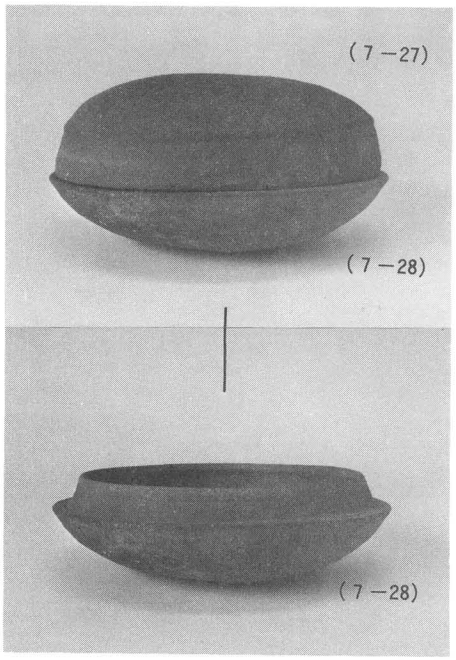
航空写真上（S31）の位置

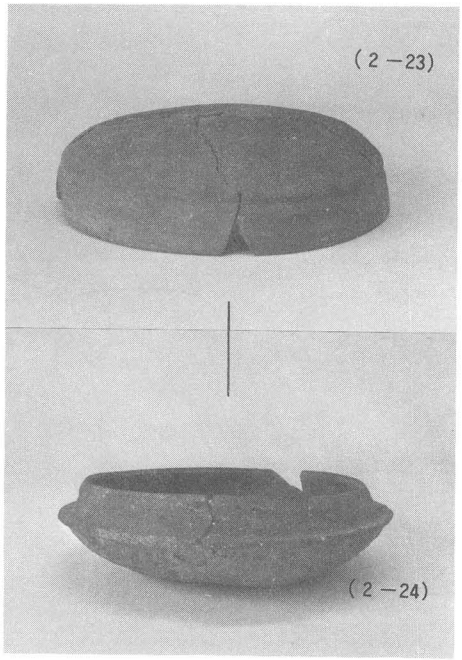


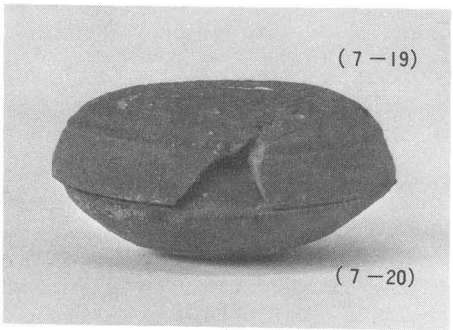
第4トレンチ

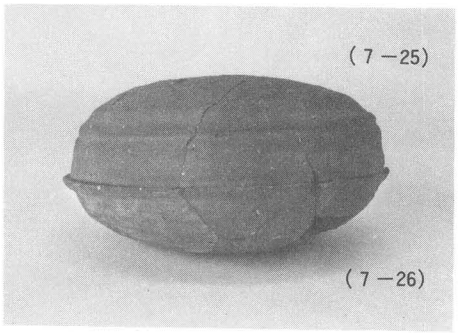
第7トレンチ

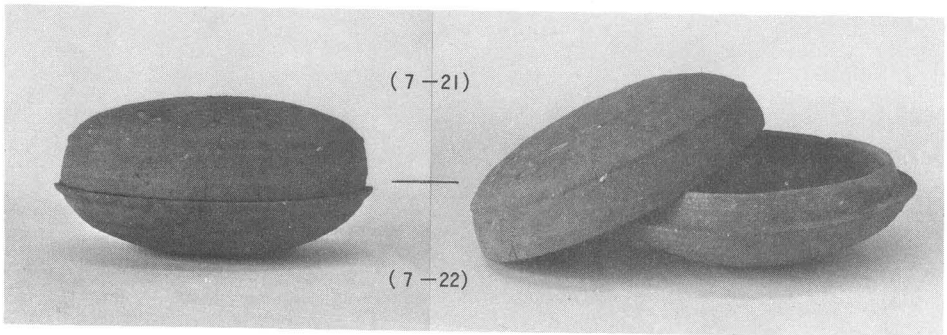
図版6　2－23窯跡第3トレンチ床面出土遺物

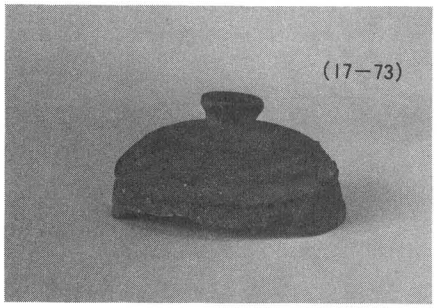


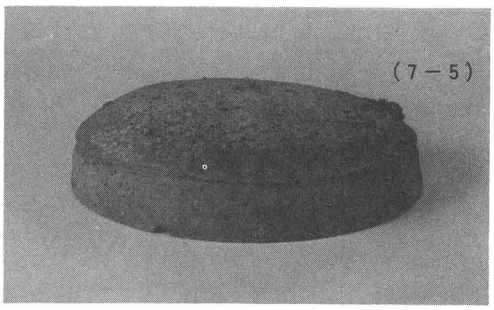


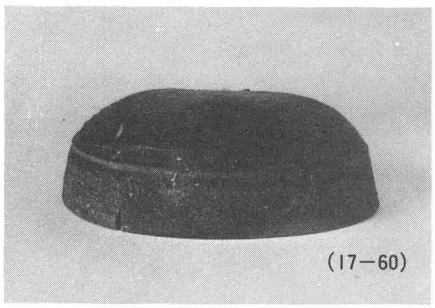


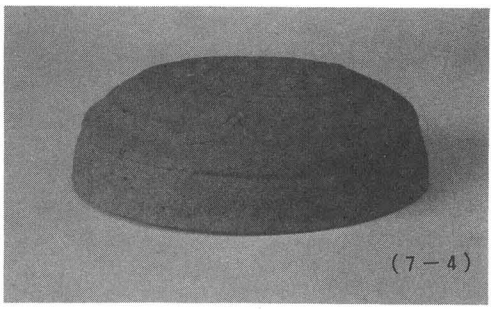


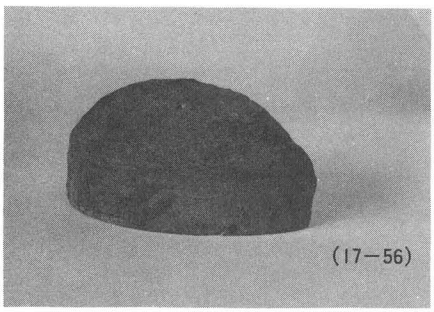


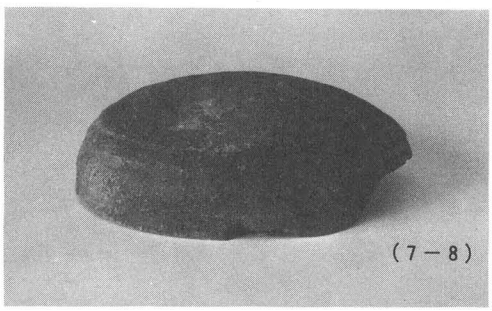

(17－73)

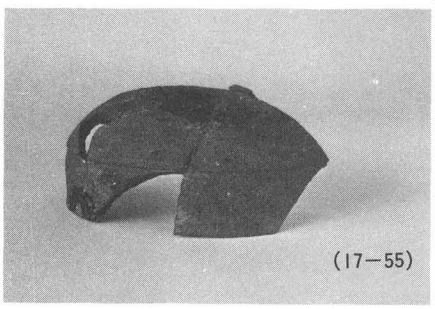

(7－5)

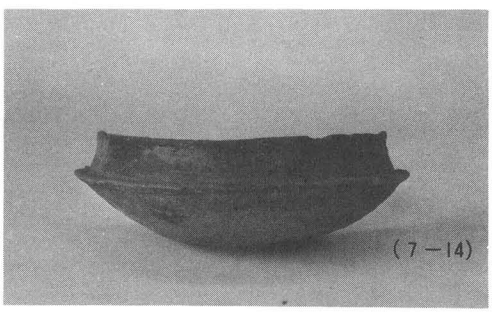

(17－60)

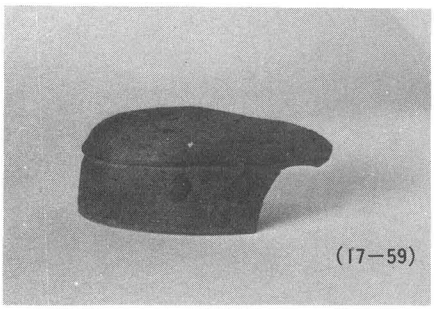

(7－4)

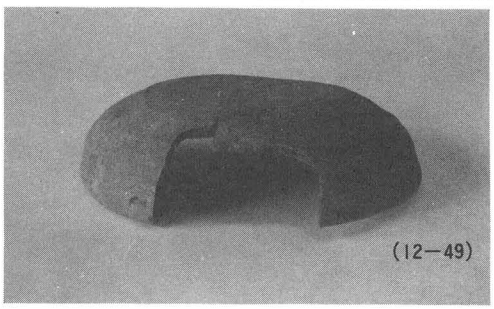

(17－56)


(7－8)


(17－55)


(7－14)


(17－59)


(12－49)